



# 文学部生になったら - 学生3人に聞く -

**三宅 舞佐志**  
(MIYAKE Musashi 2年生)  
広島市立基町高等学校卒業

## 1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1	日本史 A	西洋史特殊講義	東洋史特殊講義		
2	東洋史特殊講義	越境する文化		生物学 B	
3	中国文学演習	西洋美術史	英語オーラルⅢ	中国語中級 C1	国語学特殊講義
4	英語リーディングⅢ			東洋史演習	
5		応用倫理学講義			

2回生になり東洋史専修に配属になりました。東洋史の授業自体は去年から比較的たくさん受けていて、そのため今回は演習は少なめです。この1年間で多くの演習を受けて沢山のものを得ました。史料を読む力や9か国語で自己紹介ができる力がつき、高い志を持つ友人が増え、体重が14kg増えました。

## ある1日の過ごし方

- 4:00 起床。
- 7:15 朝食、支度、ストレッチ、授業の予習をします。
- 9:00 部活終了、プロテインを飲みます。
- 10:40 2限「生物学B」
- 12:10 2限終了。
- 13:20 3限「中国語中級C1」
- 14:50 3限終了。
- 15:10 4限「東洋史演習」
- 16:40 急いで部活へ。
- 17:40 部活終了。
- 20:00 プロテインを飲んだり、片付けをします。
- 22:00 電車帰宅。
- 23:00 プロテインを飲んでから寝ます。

阪神新在家駅付近に下宿しています。周辺にはいろいろなお店があるので便利です。部活は水泳部に所属しています。苦業を共にし筋肉について語り合う仲間は家族のような存在です。そして2回生になり初めての2限までできました。やはり後輩は可愛いものです。僕も去年は可愛かったのでしょうか。自分の生活を始めて早一年、料理とは奥深いものだとひしひしと感じます。どんなに設備が整ったキッチンでも、料理の味を生み出すためには、道具の揃ったキッチンを用意してそれだけで一流の味を生み出すわけではないのです。途中で投げ出せば当然料理は完成しませんし、作り方を誤ったり手を抜けば美味しいものは作れません。その点料理と大学生活は似ています。大学とは4年という歳月をかけて「自己」という食材を調理する厨房です。厨房に入っただけでは料理は完成しません。つまり4年後食材からのようなものが完成するか、それは4年間何をするかが一番重要だということです。大学はどの程度で作業の厨房はありません。僕が今調理しているものがちゃんと美味しくできるのかまだわかりませんが、今はただただ調理を楽しんでいます。可能性は無限大です。皆さんも神戸大学文学部という素晴らしい厨房で自分だけの最高の料理を作ってみませんか。



**三宅 萌**  
(MIYAKE Moe 1年生)  
兵庫県立姫路西高等学校卒業

## 1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1			English Communication	人文学導入演習(国文学)	初年次セミナー
2	English Literacy	人文学導入演習	健康・スポーツ科学基礎		芸術学特殊講義
3	哲学入門	人文学導入演習(芸術学)	情報基礎	哲学特殊講義	文章表現
4	文学入門	フランス語初級		フランス語初級	
5					

小児のころより幸せになりたいとあるいは幸せとは何であるかなど、もの思いに耽ることが多く、広くは幸福の追求に最も役立つように考えられたので文学部に入りました。言葉や言葉に難いものに強く惹かれます。専修は芸術学や哲学、言語学や文学を考えておりますが、どこに振り分けられてもすべきことは同じなのかなとも思っています。

## ある1日の過ごし方

- 6:00 二度寝したい思いをこらして起床、朝食。
- 7:00 慌ただしく外出
- 8:50 「人文学導入演習(国文学)」
- 10:20 一限終了、導入演習(古典学)の課題に
- 13:20 「哲学特殊講義」
- 15:10 フランス語
- 16:40 近道である階段をとり六甲第一キャンパスの部室へ。
- 19:30 部長と山道を下り駅へ(たまに夕食を共に)
- 22:00 帰宅、お風呂、片付けなど
- 23:00 就寝

県内の小さな町にある実家からおよそ2時間かけて通学しています。週の後半、一限のある日は肩甲骨あたりに疲労を感じますが、電車だけで確保された往復二時間に(受験勉強の憂いなく)読書できることはいつても楽しく、始業前に車窓を飛ばし良い時間となっています。JR 六甲道駅からバスに揺られています。バスが通らない季節には歩いて山道を登るのも良いかもしれません。サークルは文芸研究会に属しており、週に二度部室でものを読みながら話しています。同じ文章からどう想像の意を伸ばしてゆくかに個人差の現れるのは面白く、一人で読むときはまた違った喜びを感じます。アルバイトの類はとくにしていません。自由に使えるお金の多くはないことに多少の不便はありますが、ざりとて急ぎお金のいるような場面もなく、大学生だからバイトをしななければならないといった妄想に憑かれているわけでもないのです。勉強や部活や労働や交遊に忙しいことを書き入れて満足することの息遣い自覚的であること、学生生活の努めとしたいです。からっぽの時間は作るようにしなければ持たないのではありません。そして何らかの余白がなければ吸収したものを定着させることも、それを活かすこともできないように思えます。ぜひ皆さんも文学部にて豊かさの意味を問いなおし、もっと素晴らしい、もっと感動的な世界を発見していきましょう。

## 学部時代の思い出



**大藤 真人** (OTSUJI Masato 大学院人文学研究科 博士課程前期課程 1年生)

神戸大学文学部では、一年生の間は主に語学・教養の授業を履修しつつ、文学部で入門の授業を受け、自分の専門とする分野を選びます。二年生以降は各専修に配属され、自分の専門領域について学んでいくことになります。私は哲学を専門としています。講義では、古代ギリシア哲学から応用倫理学まで幅広い話題について学びました。演習では、主に少人数で特定の哲学者の著作を講義し、議論を行いました。講義と同様、プラトン、アリストテレス、カントなどの古典から現代の哲学者まで様々な哲学者を扱います。私はどちらかと言えば、演習の方が好きで、過去の哲学者の思考に触れ、参加者と意見を交わし合うのは、とても興奮に満ちた時間でした。四年生になると、就職活動や人によっては大学院入試の試験勉強をしながら、卒業論文の作成に入ります。なので、四年生は特に忙しくなります。

文学部で学ぶ事柄の良い点のひとつは、大学から離れてもある程度は自分で勉強を続けられることかなと思います。もちろん、実験が必要な領域もありますが、これは必ずしもすべての領域に当てはまるわけではないでしょう。しかし、少なくとも私が関心をもった哲学という分野は、そういった側面があります。自分が関心をもった事に取り組み続けられるというのは、素晴らしいことだと思います。神戸大学文学部では文学から心理学まで様々な専門領域に触れることができ、それゆえ自分が今後何者になりたいと思えるテーマを見つけるには最適な場所です。自分にとっては、そうしたテーマを探す期間が学部の四年間だったと、振り返って感じています。

## 入学から卒業まで

### ① 専修の決定 — 「よく考えて自分の専門を決めることができる」

文学部には、哲学、文学、史学、知識システム、社会文化という5講座に15の専修があります。1年次の11月末頃に専修を決め、2年生からそれぞれの専修に所属することになります。自分は文学部でなにを研究したいのか、じっくり考えてから選ぶことができます。そのために、各講座ごとのガイダンスとも呼ばれる「入門」、人文学への導入をはかる「人文学導入演習」、そして各専修での研究の基礎を身につける「人文学基礎」など、学生の興味・関心に応じて選択できるような、いくつかの内容に分けて1年生向けの授業が複数開講されています。これを参考に、自分の進む専修を決定します。

### ② 文学部の授業科目 — 「四年一貫で学ぶ人文学の多様な広がり」

文学部の学生が4年間に学ぶ授業科目は、全学共通授業科目と文学部の専門科目に分けることができます。全学共通授業科目は、教養科目、外国語科目、健康・スポーツ科学などで構成されています。文学部の専門科目は、基礎科目、自由選択科目、卒業論文関連科目、卒業論文からなります。下の図に履修に関する学年ごとの大まかな流れを示します。

1年	2年	3年	4年
基礎教養科目 総合教養科目	基礎教養科目 総合教養科目	高度教養科目	高度教養科目
外国語科目	外国語科目	専門科目	専門科目
健康・スポーツ科学			卒業論文
専門科目 (基礎科目)	専門科目		

**教養科目** 教養科目には、原則として1・2年次に履修する基礎教養科目と総合教養科目、3・4年次に履修する高度教養科目があります。人文学だけでなく社会科学や自然科学についても幅広く現代の教養として身につけて、他分野にまたがる課題を克服し解決する力を養います。文学部で人文学の研究を進める上でも、しっかりと学んでおくことが必要です。

**外国語科目** 外国語科目は、「外国語Ⅰ」として英語を、「外国語Ⅱ」として、ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語のなかからひとつを選び、合わせて2か国語を学びます。文学部ではこの他に、韓国語、イタリア語、西洋古典語(古代ギリシア語とラテン語)の授業も開講されていますが、専門次第で学生はさまざまな言語を独学します。人文学を学ぶ者にとって外国語の習得は必要不可欠です。

**基礎科目** 基礎科目は、人文学の基礎を学び、専門科目での学修を豊かなものにするための準備を行う科目です。専修決定後は、それぞれの専門を深く研究することになりますが、教養科目や基礎科目は、そのための礎石であり、自分の専門研究に広がりを与えてくれるものです。基礎科目には、各講座の入門、人文学導入演習、人文学基礎などがあります。また、大学生として自立的な学びを促すため、初年次セミナーが用意されています。**専門科目** 専門科目は、専門的な講義、演習、実習などからなります。単位制度に基づく大学の授業は、必修科目と選択科目の取得単位数がそれぞれ決められています。必修科目は必ず履修しなければなりません。選択科目は一定の範囲内から自由に選択できますが、それらは講座ごとに細かく指定されていますので、注意が必要です。また、ひとつひとつの授業の学習を徹底するために、1年間履修登録できる単位数には上限が定められています。したがって、履修にあたっては、入学後に配布される学生便覧やガイダンスでの説明に従い、各学期の始めに、どの授業を取りたいか、受けなければならないかを十分に考えて、計画的に登録してください。

### ③ 講義と演習 — 「徹底した少人数教育と課題探究能力の開発」

文学部で高い割合を占める授業科目が、特定のテーマを探究する「特殊講義」と、数人から十数人で行う「演習」、いわゆるゼミです。実験やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で行われます。中でも、文献や資料を講読したり、自分で選んだテーマについて研究報告を行い、受講者で議論を戦わせた「演習」は、専門分野の研究手法や考え方を習得し、自ら課題を発見し解決する能力を鍛えるうえで大変重要です。

### ④ 卒業論文

卒業論文は、文学部4年間の学習と研究の結晶です。自分で研究テーマを決め、指導を受けながら、論文作成のための調査や分析も自力で行います。これまでに挙げた授業科目から必要な単位数を取得した上で、原則として20,000字(400字詰め原稿用紙で50枚)程度の卒業論文を作成し、口述試験(口頭試問)に合格すれば、卒業となります。

文学部への好奇心をアップする情報紙

# LET

FACULTY OF LETTERS,  
KOBE UNIVERSITY

神戸大学文学部

2017

## 文学部の国際交流 日本で勉強して、 世界を発見する

Studying in Japan, Discovering the World

『世界』への問いかけを続けること

佐々木 祐 (社会学専修)

## 文学部生になったら — 学生3人に聞く —

### 入学から卒業まで 神戸大学文学部での4年間





# 日本で勉強して、世界を発見する

## Studying in Japan, Discovering the World

留学というのは、留学している国について学ぶことだけでなく、自分の文化について様々な発見をすることです。自分の国が好きであっても、慣れっこになってしまい、その美しさと面白さに驚くことはない場合が多いと思います。逆に、少し離れて、違う立場から、違う目で見ると、自然の美しさや文化の豊かさへの薄れてきた畏敬の念が改めて新鮮になると考えます。文学部及び人文学研究科では数多くの留学生も学んでいます。今年は例年より多く、20の国、109人の留学生が在籍しています(2016年5月1日現在)。留学生と日本人学生が触れ合う機会は授業だけではなく、毎月最初の水曜日に行われるインターナショナル・アワーという行事の中でもお互いに文化と言葉を理解し合うように努力しながら、友達を作ったり、新しいことを発見したりします。例えば、インターナショナル・アワーの一つのイベントとして、大阪の神社で働いている巫女さんを誘い、日本人の学生も、留学生も神道と日本の伝統的な文化についてたくさんの質問をしました。イベントが終わってからも、お互いに自分の文化と宗教の話が続いて、「生

まれて初めて聞いたことだ!」という発言が多かったです。「汝自身を知れ」という言葉がよく使われていますが、異文化を理解しようと思う時に特に重要であると思います。ずっと同じ国、同じようなコミュニティーで生活すると、物事の考え方が変わるはずありませんが、留学する時や外国人と出会う時に自分の国に対する見方も変わり、深くなります。例えば、私が教えている日本の文化人類学の授業では、日本人の学生にとっても、留学生にとっても一番難しいのは自分の文化を分析することです。生まれた文化と社会が当然なものだと思い、真剣に考えることは少ないからです。グローバリゼーション(国際化)というのは国ごとの伝統的な文化がなくなるのではなく、異文化と容易に触れ合う機会が増えるということだと信じています。今年の創立記念日に日本三景の天橋立に出かけて、日本人の学生と留学生は同じような反応で日本の自然の美しさに驚き、日本の創造神話について学び、バスのなかの会話でお互いに自分の国の歴史と有名な物語について話しました。



留学生担当講師  
タマス カルメン  
Tamas Carmen

大学時代は学びとして一番重要な時期で、その時期に異文化を理解できる機会もあって、世界が広がるのは本当に「見逃せないチャンス」だと思います。文学部及び人文学研究科で勉強すると、自分の文化の理解が深まり、人生を変える発見も多いと思います。

## LET MESSAGE BOX

KOJSP(神戸オックスフォード日本学プログラム)のチューターをしていてよかったところは数え切れないほどありますが、自分の暮らしている世界をもう一度見つめ直すきっかけができたことが特に嬉しかったです。

英語を勉強するとき僕は、単語帳などを使って日本語と意味を対応させて覚えてきたのですが、留学生と交流するうちに「〜という英語は日本語ではどう言うの?」と聞かれたり「……という日本語と〜という日本語はどう使い分けるの?」と質問されたりすることで、やはり言語の意味やニュアンスは一対一対応ではない、ということに改めて感じました。



たとえば「なんとなく」ってどういう意味?と聞かれたことがあります。僕は「理由はあまりわからないけど」みたいな意味かなと答えたのですが、後日留学生がかわいい猫を見て興奮気味に「かわいい!」猫はかわいい!と言ったとき違和感を抱き、感情の昂った場面では「なんとなく」はあまり使わないんだけどどう説明したらいいだろうか、僕は「なんとなく」を今までなんとなく使っていたのだな……と思いました。このように僕自身が日本語について再認識する場が多く、とても貴重で楽しい経験ができました。

辻 啓人  
(KOJSPチューター学生)



神戸に来て3年目になりました。最初に心が引かれたのは神戸の景色です。神戸大学は山の上にあつて、展望台または教室から、綺麗な海が見えます。町の風景も満喫できます。特に、夜景が素晴らしいです。神戸は港町で昔から世界各地から来た人が多くて、国際交流が盛んに行われています。毎年留学生フォーラムやバス旅行などいろいろなイベントが行われています。留学生でも日本人でも積極的に参加していて、日本文化だけでなく、世界各地の文化に触れることができます。たくさんの友達と知り合せて、美味しいものを食べて、楽しいです。

神戸大学の先生と学生は研究や勉強に熱心に取り組んでいます。図書館は所蔵が多くあって、他の図書館の本や資料でも取り寄せてくれます。先生は優しく、勉強の面でも生活の面でもお話をしてくれます。先生と友達のおかげで、心が強くなります。

最近、私は洋画に興味を持ち始めて、関西にはいろいろな美術館があるので、暇な時に見回っています。展覧会や音楽会についての情報は学校の掲示板にもついています。

私にとって、留学生活で心に残っている思い出がいっぱいあります。日本に来てよかったと思います。

郭 聖琳  
(博士課程後期課程留学生、中国)

私がKOJSPチューターの活動に参加しようと思った理由はシンプルで、外国人の友達が好きで、ただそれだけのことでした。昔から洋楽や海外の文学、映画に興味があり、違う文化圏で育った人と話をする機会が欲しかったのです。

現実に留学生と仲良くなり学んだことは、文化的な差異はそれほど決定的な違いにはならないということです。確かに身体的特徴や言語の違い、食事のマナー等は異なる部分が多く、時に僕たちを困惑させます。しかし、僕たちは「若さ」という優れた武器を持っています。それはお互いの興味や知的好奇心を刺激し、相互理解を試みさせ、文化の違いという大きな壁を打ち壊すことができます。日常のいたる所でイギリスとは違うことが起きます。その度に彼らは戸惑い、困惑しますが、それ以上に状況を楽しみ、学ぶ強さを持っています。それは僕たち日本人も同じで、彼らが違和感や当惑を感じた所を知るたびに自分の文化を再考し、楽しむことができます。



新しい友達ができることは楽しいことです。それが留学生であればなお一層嬉しく、刺激的であると思います。神戸大に入ったらぜひチューターの活動に参加してみてください。

井上 護  
(KOJSPチューター学生)

私はアメリカからの交換留学生で、もう七月神戸大学の文学部で勉強させていただいています。帰国したくなる程、忘れがたい経験をしています。

日本語力不足で授業の内容は完全に掴めていないと言っても、教えてくださる先生方の情熱は確かに伝わります。そして、チューターさんを初め、出会った学生達の勉強と研究に対する情熱は圧倒されるくらいで、惚れます。



しかし、皆が勉強に熱心なだけではなく、親切に外国人である私とも接してくれます。非社交的な私でも、クラスメート・先生・事務の方々との親しい関係を築くことができ、助かっています。授業以外にも友達を作る機会がたくさんあります。考古研究会の皆さんにも暖かく歓迎してもらいましたし、文学部の方々も留学生と日本人との交流を深めるイベントを色々主催してくれました。

熱心で優しい人々以外にも一生心に残る物はもう一つあります。山に立つ神大ならではの絶景です。広がる神戸市と天を突く山岳、七ヶ月ずっと同じ風景を見ているはずなのに、まだ思わず溜め息が出る感じがしばしばあるくらいです。

Patrick Keane  
(交換留学生、米国)



私は日本を訪れたことがなく、家族と離れて生活した経験もほとんどありませんでした。だから、留学を楽しみにしていた一方、すごく不安もありました。

日本に着いてから、いろいろな困難がありました。そのような心配は無用のものであるということがわかってきました。文学部の事務員と先生方はとても優しく、悩み事があつたらいつでも助けてくださいます。それに、留学生はみんな「チューター」を割り当てられています。「チューター」は日本人、あるいは流暢に日本語が話せる学生で、週に一回は会うことになっています。その時間を使って、宿題や生活の問題と一緒に解決するので、日本に着いたばかりの私にとつて、チューターはとても大きな存在でした!その時期に様々な手続きが重なり、とてもストレスが溜まったので、一緒に市役所や銀行に行つて説明してくれる人がいることは本当に大きな助けになりました。

一人で外国に引越して一から友達を作るのかと心配される方が多いと思います。しかし、文学部でいつも何かのイベントが催されているはずなのに、新しい友達に出会う契機がたくさんあります。無料のバス旅行まで計画して下さいますので、そういった機会を是非利用してみてください!

Dylan Fothergill-Pounder  
(KOJSP留学生、英国)

## 『世界』への問いかけを続けること

神戸大学文学部のある六甲台第二キャンパスからは、神戸市全域とその向こうに広がる大阪湾、そしてはるか淡路島までも見わたすことができます。大学までの坂道はやや厳しいものの、それもこの素晴らしい眺めで報われようというものです。絶好のロケーションにある我が文学部ですが、ここは第二次世界大戦終了からしばらくのあいだ、占領軍であるアメリカ軍の将校用住宅地「六甲ハウス」として使用されていました。当時の航空写真を見てみれば、現在の敷地の構造がかつての軍人居住区のそれを非常によく保存していることに驚かされます。ともあれ、1958年に土地が返還されるまで、日本に住む一般の人々にとってこの眺望を享受することは禁じられていたのです。

神戸大空襲と戦後の復興、六甲山系の土砂を使用した埋め立てや再開発によって急速に塗り換えられていたこの風景は、1995年の阪神・淡路大震災で再び劇的な変化を被りました。神戸大関係者も含めて多くの犠牲者を出したあの悲劇から20年以上経過した今、眼下に広がる風景は全く新しい様相を私たちに示しながら、現在も刻一刻と変化しつつあります。

こうしてみると、文学部からの眺めという「ただそれだけ」のものの背後に、じつはきわめて重層的な歴史や意味、複雑な構造や動態があることがわかります。一見なんの変哲もないような事物であっても、多様な視点からの「問いかけ」と「読解」を行なうことで、思いもよらぬ相貌をわたしたちに見せてくれるようになります。また、世界のそうした変化を経験したわたしたちもまた、すでにかつての自分とはどこか違った存在になっている

ことでしょう。神戸大学文学部における営みも、まさにこうした出会いと相互変容の連続だといえるかもしれません。哲学、文学、歴史学、心理学、言語学、芸術学、社会学、美術史学、地理学といったさまざまな学的視座から、過去から現在にいたる(あるいは、未来にいたる)ひとつひとつのとり組みに対する問いかけが、日夜続けられているのです。また、そうした試みの過程で顕れてくる「世界」の新たな意味は、さらなる問いへと、わたしたちを誘ってくれます。またこうした発見は、それぞれの学的領域において批判・検証され、より豊かな「知」の共有財産として蓄積され継承されてゆきます。このように、文学部における個別の営みは、きわめて広範な人類の知的作業へと接続されているわけです。そうしてみれば、世界への問いかけというこのとり組み自体が、本来的な意味における「グローバル」な共同作業にほかならないでしょう。開放的な神戸大学において世界への問いかけを続けるなかで、全く新しい視野と全く新しい「自分」を獲得すること。そうした作業を皆さんとともに進めたいと思っています。

## 佐々木 祐 准教授(社会学専修)

